

多摩市が オレンジ色に染まる日



とされている。アメリカではカブがあまり馴染みがなかったため、代わりにカボチャが定着したという。

【日本ではいつから?】

一九七〇年代にキデイランド原宿店が初めてハロウィン関連商品の販売を始めたらしい。イベントとなると、一九八三年にやはりキデイランドが表参道で行ったパレードが初だとか。さらに一九九七年に東京デイズニールランドが、二〇〇二年にはユニバーサルスタジオジャパンがハロウィンイベントを開催。他にも子ども英語教室でとか、SNSの普及、お菓子メーカーが商戦を仕掛けた等、いろんなキツカケが相まって、ハロウィンは一気に日本中に広まった。日本人は海外から伝わった文化を日本で独自に進化させて、地域の民間行事の一つとして楽しむのが上手である。

【は、ハロウィン?】

ハロウィンは、アイルランドやスコットランドで始まり、元々は秋の収穫祭、悪魔祓いの儀式であった。11月1日を新年とし、大晦日に当たる10月31日には家族に会いに来る死者の魂と共に、悪魔も来て悪さをするため、悪霊を驚かせ、追い払うために、仮面をかぶったり魔除けの灯をともしたりしたのが起源とされている。

【カボチャのランタン】

ジャック・オー・ランタンとは「吊り下げ式のランプを持っている男」という意味で、アイルランドのジャックが地獄の火種を入れるのに、カブをくりぬいてランタンを作った

結びついた。多摩センター地区連絡協議会のたくさんの企業とともに、二〇〇三年に多摩センターで始めたハロウィン



イベントは、初めは三千人ほどの通りすがりのお客様だったのが、翌年は3万人の人数となり、やがては地方からも続々集まり、3日間で延べ36万人を魅了する一大イベントへと発展して行った。

【カボチャを介してつながる力】

パルテノン大通りには中央ステージが生まれ、数々の団体が歌やダンスや、それはそれはステキな舞台をくり広げる。三角広場では仮装コンテストが行われ、手作りなの!? とビックリするような傑作を着たファミリーが皆の拍手を浴びている。仮装コーナーでは身近な材料から世界に1つの素晴らしい衣装ができあがる。多摩モノレールはハロウィン仕様に飾られ、仮装パレードでぞろぞろ歩き、街なかに立つオバケ風な人にゲームを挑んで勝

300個以上もの灯がともったカボチャ



つたらキャンディーがもらえる。「トリック・オア・トリート」は、指令書に記載された地図を頼りにお店を探して歩き、合言葉を言うステキなお菓子がもらえる、というワクワクもの。それが普通のスタンプリートと大きく違うのは、ただお菓子をもらうのが目的ではなく、自分の足で探す、知らない大人に話しかける、自己アピールする、交流する、お礼を言う、といった、今の子どもたちにとって大切な「生きる力」「つながる力」を育くむ場が提供されるのだ。夜には中央ステージで三百個以上ものカボチャに灯がともるのは国内最大級。それはそれは幻想的で、現世を忘れてしまう。八ヶ岳の広大な畑で大切に育てられたカボチャは、ハロウィンを楽しむ心を持った大人たちの手によって掘られ、子どもたちの手でランタンに生まれ変わり、今年も美しく輝くのであった。